

レバノンにおけるシーア派系学校の文化的特質に関する考察

— ベールの着用規定と学校の休日にみられるイスラーム性と信仰 —

The Study of Islam and Belief in Shi'ite Schools in Lebanon

— from the points of veils and school holidays —

三 尾 真 琴

Makoto MIO

はじめに

イラクでは2005年1月30日に国民議会選挙が実施され、4月28日にはシーア派のイブラヒム・ジャファリ首相が率いる移行内閣が発足した¹⁾。各宗派の連合体ではあるが、シーア派が中核を担う内閣である。イラクのシーア派は全国民の60%を占める宗派でありながら、フサイン体制下では、職業選択や移動など社会・経済的権利をはじめ基本的人権も侵害されてきた。他方、イラクと同様に、人口では第一位を占めながら、長年社会の周縁に置かれていたのがレバノン共和国（以下、レバノンと称する）のシーア派である。レバノンでもシーア派はイスラームの異端とみなされ、多くの不利益を被ってきた。

レバノンは領域の東部を地中海に面し、北部と西部の大半をシリア・アラブ共和国（以下、シリアと称する）に、南部をイスラエルと接する、国土面積が約1万平方キロメートル、約400万人の人口規模をもつ国家である。小規模国家と位置づけられるなかで18の宗教宗派が公認されている²⁾。1943年にフランスから独立する際、宗派バランスを重視し政治をおこなう「宗派主義」³⁾を採用した。宗派主義は本来統治システムであるが、学校教育、

とくに宗派系私立学校に大きな影響を与え⁴⁾、公教育において私立学校が優位に立つという中東アラブ諸国では非常にユニークな学校教育に結びついている⁵⁾。

本稿は、レバノンのシーア派系学校がどのような文化的特色を保持しているのかを女子生徒に対するベール着用と学校の休日に焦点をあて明らかにする。学校におけるベール着用は、近年、フランスやベルギーなどヨーロッパを中心に、イスラームの象徴として、その可否が大きな議論になっており⁶⁾、ベール着用の問題はイスラーム性をめぐる主要な指標の一つに位置づけられる。一方、学校の休日は、わが国を含め、一般に、私立学校と公立学校間でそれほど大きな相違はない。しかし、私立学校に広範な教育の権利を認めたレバノンの場合、学校の休日は公立と私立間で、また、同一宗派間でも学校組織で異なっている。このように私立学校が自らの判断で学校の休日を決定しており、宗派を単位とした歴史認識や政治的志向がそこに反映され得ると考えられる。すなわちベールの着用と学校の休日にあらわれる文化的特質は学校教育においてイスラーム性と信仰がどのように反映されているのかを考察する指標となり、また、特定

の価値観の発露とみなすことが可能である。

シーア派系学校の文化的特質を考察する前提として、シーア派のレバノン社会における位置づけと近代学校への対応を整理する。さまざまな制約や迫害を経験し、近代学校の建設にも立ちおくれたレバノンのシーア派コミュニティが、アイデンティティの表明が可能になった内戦終結後、学校教育をどのように位置づけているのであろうか。筆者のフィールド調査に基づき、ベール着用を含んだ服装規定と学校の休日の実態をまとめ、それらにあらわれるシーア派系学校の文化的特質を指摘する。それらを手がかりに厳格な宗教教育が教育の中心とみなされがちなシーア派系学校のレバノン社会における分類を試みる。

第1章 レバノン社会におけるシーア派の位置づけと近代学校

1) レバノン社会におけるシーア派

本稿が対象とするシーア派は十二イマーム派である⁷⁾。十二イマーム派はシーア派における主要宗派で、イラクでは60%以上の多数を占め、イランでは公式宗派にもなっている。

レバノンのシーア派は、内戦⁸⁾が終結した1990年以降、キリスト教系マロン派⁹⁾やスンナ派¹⁰⁾とともに中核をになう宗派として内政に参画している。しかし、歴史的にシーア派は、イラクでの状況と同様、レバノンでも最大宗派で約35%の人口¹¹⁾を占めているにも関わらず、たびたび支配者から迫害を受け、社会的・政治的・経済的・文化的にレバノン社会の周縁に放置されてきた¹²⁾。

シーア派が長年迫害の対象となり軽視されてきた背景には、二つの要因が考えられる。一つは、「支配者の宗派」に該当するスンナ派からみたシーア派の歴史認識と信仰・儀礼上の相違である。例えば、シーア派はスンナ派が認めるムハンマド没後の四大カリフのう

ち、第4代カリフのアリー（シーア派の初代イマーム）こそがムハンマドの後継者であるとして初代から第3代カリフまでを否定する。イスラーム思想学者の中村は、「最初のカリフの正当性を否認することは、スンナ派にとって、ウンマ（イスラーム共同体—引用者注）全体が誤った選択をしたということ、…。これはスンナ派体系の基盤そのものを否定するものである」とシーア派とスンナ派との対立はこの時決定的なものになった¹³⁾と述べる。また、スンナ派ではカリフは人間であり誤りを犯しうるとみなされている。それゆえ、ウンマの合意（イジュマー）が得られるように努力をし、その決定を法源の一つとして重視する。他方、シーア派では指導者を意味するイマームは誤りを犯し得ない存在と位置づけ、イマームに不可謬性を認めている。したがって、シーア派ではイジュマーにそれほど意義を認めない。さらに、スンナ派はシーア派の儀礼にも違和感を覚える。その代表的な例が「アーシューラー」の儀礼¹⁴⁾である。アーシューラーは、イマーム・フサイン一行の殉教を嘆き悲しむ哀悼祭であり、ウマイヤ朝（スンナ派）を不義の対象とみなす歴史物語でもある¹⁵⁾。期間中はシーア派の居住地域は黒一色となり、最終日には、鎖や刀で自らの体を打ち（スィーネ＝ザニー）、カルバラーでのフサインの殉死を悼む行為もおこなわれる。このスィーネ＝ザニーは流血をとまなうものであり、こうした儀礼が為政者や異教徒にはある種の恐怖をもたらし、宗教的に「逸脱」「過激」といった見方に結びついていった。

第二の要因は彼らの居住地域とその文化的結びつきにある。シーア派の大半はベイルートやトリポリなど都市部から離れた南部レバノンやベッカーに居住していた。これらの地域は1920年のフランス委任統治開始時に「大レバノン」に併合されたに過ぎない。すなわ

ち、それまでシーア派住民の大半は「レバノン」の領域外で生活をしてきた。彼らは、歴史的に、同じ信仰をもつイラクやイランのシーア派と関係が深く¹⁶⁾、バイルートやトリポリに居住するスンナ派やギリシャ正教徒ならびにバイルート近郊に住むキリスト教徒やドルーズ派¹⁷⁾とはほとんど交流がなかったのである。

オスマン朝支配時には、シーア派はイスラームの異端とされ、宗教法や裁判権が認められなかった¹⁸⁾。モスクへのシーア派信徒の出入りはスンナ派の宗教指導者からたびたび拒絶され¹⁹⁾、アーシューラーの儀礼は禁止された²⁰⁾。フランス委任統治の開始に伴い、シーア派に国会の議席数が割り当てられた。シーア派の名望家や住民は生活の向上を求めてバイルートなどの都市部へ流入した。しかし、前述のとおり、スンナ派はシーア派を相容れない存在と認識しており、シーア派信徒の定住を好まず、さまざまな差別的待遇を課した。シーア派信徒の就労は困難を極め、単純労働、靴磨き、門番、通りの掃除、エレベーター・ボーイなどで生計を立てざるを得なかった²¹⁾。シーア派の多くは南部レバノンやベッカーに留まり、同地域の小作農として、貧しい生活を余儀なくされた。1943年の独立以降もシーア派住民への差別的待遇や貧困は改善されなかった²²⁾。彼らがマロン派やスンナ派とともに社会の中核として位置づけられるのは、1990年の内戦終結以降である。

1975年に勃発し1990年に終結したレバノン内戦は、シーア派コミュニティに大きな変革をもたらした。イスラエル軍による南部レバノンへの攻撃やシーア派民兵の組織化などでシーア派住民のバイルート移住が促進され、バイルート南部一帯にシーア派のコミュニティが形成された。また、シリアやイランの支援を受けたアマル (AMAL) とヒズブッラー (Hizbullah) は勢力を拡大し、政治領域での

発言力も増大した。1992年には、両民兵組織とも政党として認められ、国政に参画している²³⁾。

2) シーア派コミュニティと近代学校

シーア派住民の主たる居住地域である南部レバノンのアーミル山地 (Jabal 'Amil) は、シーア派の学問の中心であった²⁴⁾。とくにシーア派のファーティマ朝がシリアを支配した十世紀から十二世紀にかけて多数の伝統的な教育機関が開設され大きく発展した²⁵⁾。伝統的な教育機関は、基礎教育に相当するクッターブ (コーラン学校) と上級の宗教学校に相当するマドラサ・アッディーン (宗教学校) に大別される。クッターブは主にモスクでおこなわれた。子どもたちはモスクに集い、床に教師を中心にして車座になり、コーランの朗誦と礼拝の仕方や儀礼を学んだ。また、コーランの朗誦とともにアラビア語の基礎的な文法を教えられ、簡単な読み書きや計算も学んだ²⁶⁾。

このように教育はイスラーム理解を中心に伝統的な教育機関により発展したが、その後スンナ派王朝の統治になった十四世紀以降、一転してシーア派の教育活動ならびに社会的条件は悪化の一途をたどった。それでも、十六世紀、イランに十二イマーム派を国教と定めたサファヴィー朝が開かれた際、国王シャー・イスマイールの招きにより、アーミル山地より多くのウラマー (イスラーム法学者) がイランに渡った²⁷⁾。

レバノンでは十九世紀の初頭から半ばにかけて、主にフランスやイギリス、アメリカのキリスト教宣教団により近代学校につながる教育機関が多数建設された。スンナ派信徒の多くはヨーロッパとの交易に携わり、近代学校で教授される外国語、数学、地理などの知識を必要としていたため、近代学校の導入に

対しても積極的に取り組んだ²⁸⁾。他方、シーア派の居住地域では一般に近代学校への関心は高まらなかった²⁹⁾。シーア派の置かれた社会的、文化的、経済的な状況が両者の相違をもたらしたと見てよい。シーア派住民の主たる産業は農業であり、コミュニティにとって子どもたちは重要な労働力であった。小作農であったシーア派信徒は貧しく、彼らの大半は学校教育に生活費を割く余裕がなかった。また、学校教育は農業に従事する子どもたちにとってほとんど意味をなさなかった。なかでも近代学校教育の導入をはばむ主要な障害になったのはシーア派のウラマーであった。シーア派コミュニティでは、ウラマーが法解釈に関する大きな権限をもち、諸問題への裁定を下し、住民間の争い事の仲裁をおこなった。また、彼らはコーラン学校を主催していた。近代学校は、ウラマーにとって、彼らの指導的な地位を脅かす存在と映った³⁰⁾。

3) シーア派系学校

二十世紀の初頭から中頃にかけて、キリス

ト教系やスンナ派に大きく遅れたものの、近代学校の必要性を認識する者があり、南部レバノンとバイルートでシーア派系近代学校が建設された。マッカーシード・ナバティーエ・スクール (Makassed Nabatieh School)³¹⁾、アーミリーエ・スクール (Amilieh School)、ジャーファリーエ・スクール (Jaafarih School) の3校である。マッカーシード・ナバティーエ・スクールは1910年にナバティーエに設立され、シーア派系学校として最も長い歴史を有する。1929年にアーミリーエ・スクールがバイルートに、1938年にジャーファリーエ・スクールがスールに開設された。これらの3校は伝統的なコーラン学校とは異なり、外国語や数学、歴史、地理などの教科を取り入れた。上記3校以外に新たなシーア派系学校は開設されなかったが、内戦終結前後になってマバラート協会 (Mabarrat Association)、ムスタッファ (Mustapha) 系、アマル (AMAL) 系、ヒズブラー (Hizbullah) 系組織が学校を開設した。

表1 シーア派系主要学校の特質

学校	ジャーファリーエ	アーミリーエ	マバラート
教育組織 (設立年)	ジャーファリーエ協会 (1938年)	アーミリーエ協会 (1929年)	マバラート協会 (1977年)
特徴	創設者は著名な法学者 女子教育と就学前教育を重視 キリスト教徒が比較的多い 地域(スール)との関係が密	南部からバイルートへ移住 自由な雰囲気 シーア派最初の中等学校 私立学校連盟の会員	理事長はアヤトラー 設立目的は孤児の救済 教育水準が高い 宗教教育を重視 イランとは一定の距離
学校数と 生徒数	普通学校1校(スール) 職業学校1校 そのほかフリースクール 約1,380名	普通学校3校(バイルート) フリースクール2校 約3,500名	バイルート4校, 南部5校 ベッカー5校, 職業2校 計16校 約13,500名
宗派構成	シーア派87% キリスト教徒8% スンナ派5%	シーア派95% スンナ派5%	シーア派の子弟
教育課程	幼～後期中等課程	幼～後期中等課程	幼～後期中等課程

学校 教育組織 (設立年)	ムスタッファ イスラム宗教教育協会 (1984年)	アマル アマル教育協会 (1986年)	ヒズブラー系 イスラーム教育機構 (1992年)
特 徴	シーア派系のエリート校 厳しい授業内容 ヒズブラー、イランに近い 宗教教育を重視 宗教教師の養成と派遣	男女共学 教育省の教科書を採択 政府の教育政策を支持 校医・カウンセラー常駐 高水準の教育を目指す	イスラーム色強い イランとの関係が強い 宗教教育を重視 歴史教科書の政治性
学校数と 生徒数	バイルート3校, 南部2校 ベッカー1校 計6校 約9,500名	バイルート1校, 南部5校 ベッカー2校 計8校 約8,500名	バイルート2校, 南部6校 ベッカー3校 イラン1校 計12校 約6,800名
宗派構成	シーア派の子弟	シーア派の子弟	シーア派の子弟
教育課程	幼～後期中等課程	幼～後期中等課程	幼～前期中等課程

* 現地調査にもとづき筆者作成

本稿では断交状態にあるイスラエルとの国境近くに開設されているため、調査を十分におこなうことができなかつたマッカーシード・ナバティーエ・スクールを除く6学校組織を対象とする。

(ジャーファリーエ・スクール)

ジャーファリーエ・スクールは、1938年に南部レバノンのスール (Sour) にサイヤッド アブダル・フサイン シャラファッディーン(Sayyid Abd al-Husain Sharaf al-Din)³²⁾によって設立された。彼は、当時、シーア派コミュニティではほとんど考慮されていなかった女子教育と就学前教育にも着手した。しかし、ウラマーの強い反対にあい、コミュニティでも積極的な支持が得られなかった。現在、就学前課程から後期中等課程までをもつ普通学校と秘書、幼稚園教諭、看護婦資格の取得が可能なコースを前期中等課程に置く職業学校を開設している。生徒数は普通科が750名、職業科が180名、フリー・スクールが450名程度である (2004年8月現在)。フリー・スクールとは授業料が無料の私立学校を指し、政府から助成金が支給され公立学校にかわり初等



ジャーファリーエ・スクールの授業風景 (スール)

課程を提供している学校をいう。ジャーファリーエ・スクールの特徴の一つとしてキリスト教徒の割合が8%程度を占め、他のシーア派系学校に比べ高いことがあげられる。スールは交易が盛んな都市で、ムスリムのほか、ギリシャ正教徒やカトリック系の住民も多数居住しており、その一部が同校に入学した。

(アーミリーエ・スクール)

アーミリーエ・スクールは1929年に開設された。当初、シーア派住民の多い南部レバノンで開校を目指していたが、宗教指導者や地元有力者の了承が得られず、バイルートへ移り当地で学校を建設した³³⁾。現在、バイルー

トを中心に教育活動をおこなっているが、「アーミリーエ」という組織名はレバノン南部の「アーミル山地」を意味している。設立時より、南部レバノンからベイルートに移住したシーア派子弟の教育に従事した³⁴⁾。当初は初等学校に専念していたが、1947年に初等課程から後期中等課程までをもつ学校を設立した。1947年当時、公立の高等学校は開校されていなかった。アーミリーエ・スクールはシーア派子弟の高等教育機関への進学を促進させ、その後、同校が進学校として評価される礎を築いた³⁵⁾。ベイルートに5校が運営され、うち2校はフリー・スクールである。生徒数は5校合計で約3,500人になり、その内の95%をシーア派信徒が占める（2004年8月現在）。同校はまたスンナ派系やギリシャ正教系、カトリック系学校とともにカリキュラムや教科書の共通化を目指す「私立学校連盟」の会員でもある。

（マバラート系学校）

マバラート協会は、アヤトッラー位³⁶⁾にあるファドラッラー師（Sayyed Mohammad Hussein Fadlallah）が理事長を務める組織である。内戦やイスラエル軍の侵攻などで発生した孤児の救済を目的に1977年に設立された。最初の学校はベイルート南部に建設された。その後学校数は増加し、2003年9月現在、



マバラート系学校（ベイルート）

ベイルートに4校、南部レバノンに5校、ベッカーに5校の他に職業学校2校の計16校を運営している。生徒数は全校で約13,500名で、シーア派系の学校組織ではもっとも規模が大きく、生徒数ももっとも多い。生徒はシーア派で占められる。宗教の授業はすべての課程で週3時間があてられ本稿のシーア派系学校のなかでもっとも多い。また、進学校としても知られ、教師の質、教育内容、学校設備などの水準は高い。

（ムスタッファ系学校）

ムスタッファ系学校は1984年に設立された。組織名はイスラーム宗教教育協会（Association for Islamic Religious Education）である。学校運営の他に、宗教教師を養成し、公立・私立学校に派遣することも主要な活動である。2004年8月現在、約640校に宗教の教師を派遣している。全国統一テストの合格率が高くシーア派系学校のなかで最も有名な進学校の一つであるが、宗教教育にも力を入れている。歴史や宗教の教科書を共通にするなどヒズブッラー系学校と良好な関係にある。学校数は、ベイルートに3校、南部レバノンに2校、ベッカーに1校の計6校である。生徒数は2003年9月現在、約9,500人で、シーア派の子弟によって占められる。

（アマル系学校）

アマル系学校は政党のアマル³⁷⁾によって運営されている。1986年に設立され、2003年9月現在、ベイルートに1校、ベッカーに2校、南部レバノンに5校の8校が設立されている。設立当初、南部レバノンを中心に学校建設がなされたが、近年、ベイルートでの学校運営に積極的に乗り出している。アマル系学校は原則としてレバノン政府の教育政策を支持し、教科書についても教育省が作成したものを多

数採択している。バイルート校では学習指導ばかりでなく、校医、カウンセラーを常駐させ、生徒の健康・精神面のバック・アップを推進している。生徒数は全体で約8,500人で、シーア派信徒の子弟が占める。

(ヒズブッラー系学校)

ヒズブッラー³⁸⁾の学校組織はイスラーム教育機構(The Islamic Institution for Education and Teaching)であり、1992年に最初の学校を設立した。バイルートに2校、南部レバノンに6校、ベッカーに3校の国内11校に加え、イランのコムに1校設立している。生徒数は国内の11校の合計で約6,800人であり(2003年9月現在)、生徒はシーア派信徒で占められている。2001年に国内11校目の校舎がベッカーに建設された。ヒズブッラー系組織は、とくに内戦終結後、学校建設を積極的に推し進めている。1992年に最初の学校を設立して以来、10年間でイランの1校を含め12校を建設した。いずれも就学前課程から初等、前期中等課程までを提供する。コム(イラン)の学校は、宗教学の研究に従事しているシーア派聖職者や学生の子弟の教育を対象に開設され、使用されるカリキュラムと教科書は、レバノン国内のヒズブッラー系学校のものと同基本的な同一である。

前述のとおり、レバノンにおけるシーア派は、イラク同様、長年にわたり抑圧され、社会の周縁におかれていた。近代学校教育への対応もマロン派を中心としたキリスト教系やスンナ派に比べ大幅に遅れた。識字率は主要な宗派で最低水準であった。そのシーア派に転機が訪れたのはレバノン内戦であった。内戦を契機にシーア派の武装化ならびに組織化が図られ、内戦終結後にはレバノン社会の中核を形成する宗派となった。学校教育に関し

ても、内戦終結前後に多くのシーア派系学校が設立され、学校数・学生数とも拡大が続いている。このようにシーア派系学校の発展はレバノン社会におけるシーア派の位置づけと密接に関わっている。

第2章 ベールの着用規定とイスラーム性

女性の顔を覆うベールは、アラビア語でヒジャーブと呼ばれる。顔を覆うものを指す言葉はこの他にもリサム、キナー、ブルクーなどがある³⁹⁾。ヨーロッパのムスリム研究では、「スカーフ」という用語も使用されるが、本稿では、「ベール」(覆い隠すもの)という用語を用いる。

ムスリムの経典である『コーラン』には、イスラームの教義・実践に関わる内容、刑罰や商取引、婚姻・離婚・相続ならびに倫理・道徳的項目や食べ物・服装など広範な内容が示されている。そのなかで第33章(部族連合章)59節、第33章55節、第24章(御光章)31節などが、女性の服装やベール着用を必要とする範囲を示す代表的な章である。例えば、第33章59節には「預言者よ、あなたの妻、娘たちまた信者の女たちにも、かの女らに長衣を纏うよう告げなさい。それで認められやすく、悩まされなくてすむだろう」と啓示が下ったとされ、第33章55節には「彼女たちが(ベールをとっても)罪でないのは、彼女らの父または息子、それから兄弟、兄弟の息子または姉妹の息子、または同信の女たちと彼女たちの右手が所有する者たちである。……」、第24章31節には「信者の女たちに言ってやるがいい。かの女らの視線を低くし、貞淑を守れ。外に表れるものの外は、かの女らの美(や飾り)を目立たせてはならない。それからベールをその胸の上に垂れなさい。自分の夫または父の外は、彼女の美(や飾り)を表してはならない。……」とされる⁴⁰⁾。

本稿が対象にしたシーア派系学校すべてに服装規定があった。マバラート系とヒズブッラー系ならびにムスタッファ系の3学校組織では女子生徒にベール着用が義務づけられているのに対して、ジャーファリーエ・スクール、アーミリーエ・スクール、アマル系学校では義務づけられていなく対応が二分されていた。

マバラート系では、1) 幼稚園では男女とも黄色いTシャツあるいはその上に襟付きのライト・グリーンのスモック、2) 初等課程1年から3年の女子生徒は、襟付きの薄い黄色の長袖シャツに濃紺のベスト、薄いベージュのスカート、黒のストッキング、3) 初等課程4年から6年の女子生徒は、襟付きの薄い黄色の長袖シャツに薄いベージュのマリユール（丈がつま先に届くほど長く、長袖でワンピース型のゆったりとした上着一筆者注）、同系色のベールを着用、4) 初等課程以上の男子生徒は薄い黄色のボタン付きシャツに薄いベージュのズボンとダーク・グレーのベスト、5) 前期中等課程の女子生徒は襟付きの薄い黄色の長袖シャツにブルーのマリユール、同系色のベールを着用、6) 後期中等課程の女子生徒はモスグリーンの長袖のマリユールに同系色のベールを着用するという規定であった。

ムスタッファ系では、1) 幼稚園児は男女ともオレンジ色の後ろボタンタイプのスモック、2) 初等課程1年から3年は、男女とも襟付きの白とブルー二色の上着とジャージに似たラフなパンツ、3) 初等課程4年から6年の女子生徒は、ライト・ブルーのマリユールに白または紺のベール、4) 初等課程4年以上の男子生徒は、黒のズボンと白のボタン付きシャツを着用、5) 前期中等課程の女子生徒はブルーのマリユールに同系色のベールを着用していた。



ムスタッファ系学校の授業風景（ベイルート）

ヒズブッラー系では、1) 幼稚園児は男女ともピンクのスモック、2) 初等課程と前期中等課程の男子生徒は黒のズボンに白のボタン付きシャツ、3) 初等課程1年から3年の女子生徒はライト・ブルーのマリユール、4) 初等課程4年から6年はライト・ブルーのマリユールにダーク・ブルーのベール、5) 前期中等課程の女子生徒はライト・グレーのマリユールにダーク・グレーのベール、という規定であった。このようにマバラート系、ムスタッファ系、ヒズブッラー系学校では制服規定をもち、3学校組織すべてでベール着用が初等課程4年（9才）から義務づけられていた。

一方、ジャーファリーエ・スクール、アーミリーエ・スクール、アマル系学校では制服規定にベール着用が含まれていない。ジャーファリーエ・スクールでは、男女の児童は就学前課程・初等課程とも同じ制服になっており、就学前課程ではピンクのスモック、初等課程では襟付きのライト・ブルーのシャツを着用する。前期中等課程では普通科の女子生徒は淡いブルーの上着、職業科の女子生徒は淡いカーキ色の上着というように学科によって色の異なる制服を採用していた。前期中等課程以上の男子生徒には制服が規定されていなかった。また同校では、ベール着用に関する規定はなく、着用の是非は生徒ならびに保

護者の意向に委ねられていた。しかし、上級学年に進むにつれて白やダーク・ブルー、グレーなどのベールを着用する女子生徒の割合が高くなった。

アーミリーエ・スクールでは、就学前課程と初等課程に制服が設けられているものの中、中等課程以上には男女とも制服の規定がない。女子生徒はスラックス姿が圧倒的でスカートを身につけているケースは稀であった。ベール着用は義務づけられていないが、上級段階に進むにつれてベール着用の割合は高くなる。前期・後期中等課程では女子生徒の約30%が黒やダーク・グレー、ブルー、白などのベールを身につけていた。



アマル系学校の授業風景（南部レバノン）

アマル系学校でも制服が定められている。幼稚園では男女児童とも黄色のスマック（ズボンは自由）、初等課程1年から3年では男女とも黄色のシャツにダーク・グレーを基調にしたベスト（ズボンは自由）を着用し、初等課程4年以上は男子が黄色地のシャツとダーク・グレーのズボン、女子が黄色地のシャツとダーク・グレーのベストに同系色のズボンというように規定されていた。ベール着用は制服規定にはないが、学年が進むにつれてベールを身につける女子生徒が多くなる。前期中等課程では黄色いシャツに黒いベストまたはブレザーが制服とされているが、女子生徒の半数以上はベールを着用していた。

（まとめ）

ベールの着用を服装規定とすることでイスラーム的意義を強調する学校と、制服とはせず保護者と生徒の意思に任せる学校に二分された。マバラート系とヒズブッラー系ならびにムスタッファ系学校は前者であり、ジャーファリーエ・スクール、アーミリーエ・スクールならびにアマル系学校は後者に属する。『コーラン』には女性ムスリムがベールを着用する必要性が繰り返し示されている。マバラート系とヒズブッラー系ならびにムスタッファ系学校は『コーラン』に従い学校教育のなかでベール着用を日常化させ、生徒の意識を高めようとしている。すなわち、イスラーム的価値を重視した学校教育をおこなっている。

一方、ジャーファリーエ・スクール、アーミリーエ・スクールならびにアマル系学校は、ベール着用を制度として規定していない。これらの学校では、一見、ベール着用というイスラーム性を考慮していないようにもみえる。しかし、注意しなければならないのは、いずれの学校でも教育課程が進むとともに女子生徒がベールを着用する割合は増加し、また、学校側もベールの着用を認めていることである。ベール着用を制服とすることでイスラーム性が直接反映されるマバラート系、ヒズブッラー系、ムスタッファ系学校とは異なるものの、ジャーファリーエ・スクール、アーミリーエ・スクール、アマル系学校でもイスラーム的価値は尊重されている。

第3章 学校の休日とシーア派の信仰

表2はレバノン政府が決定した2002年度の休日とシーア派系私立学校の休日一覧表である。レバノンには年間15日の国民の祝祭日が指定されている。政府が定めた休日は、宗教的背景の有無を基準に分類が可能である。宗

表2 公的機関の休日とシーア派系私立学校の休日

学校・組織	公立	アーミリーエ	ジャーファリーエ
設立年		1929	1938
休日	クリスマス&新年 アル・フィトル 聖マロン祭 アル・アトハー 教師の日 イースター（西方） イースター（東方） ヒジュラ アーシューラー メーデー 犠牲者追悼の日 南部解放の日 ムハンマドの生誕 全聖人祭 独立記念日	クリスマス&新年 アル・フィトル 聖マロン祭 アル・アトハー 教師の日 ヒジュラ アーシューラー メーデー 犠牲者追悼の日 南部解放の日 ムハンマドの生誕 全聖人祭 独立記念日 イスラア	クリスマス&新年 アル・フィトル アル・アトハー 教師の日 イースター（西方） アーシューラー メーデー 犠牲者追悼の日 南部解放の日 ムハンマドの生誕 独立記念日

学校・組織	マバラート	ムスタッファ	アマル系	ヒズブラー系
設立年	1977	1984	1986	1992
休日	冬休み アル・フィトル 2月9日祭 アル・アトハー 教師の日 アル・ガディール 春の祝日 ヒジュラ アーシューラー メーデー 犠牲者追悼の日 南部解放の日 ムハンマドの生誕 イマームの生誕 独立記念日	冬休み アル・フィトル アル・アトハー 教師の日 アル・ガディール 春休み ヒジュラ アーシューラー メーデー 犠牲者追悼の日 南部解放の日 ムハンマドの生誕 イマームの生誕 独立記念日 コドス抵抗の日	クリスマス&新年 アル・フィトル 聖マロン祭 アル・アトハー 教師の日 イースター（西方） イースター（東方） ヒジュラ アーシューラー メーデー 犠牲者追悼の日 南部解放の日 ムハンマドの生誕 独立記念日 全聖人祭	冬休み アル・フィトル アル・アトハー 教師の日 アル・ガディール 春休み ヒジュラ アーシューラー メーデー 犠牲者追悼の日 南部解放の日 ムハンマドの生誕 イマームの生誕 独立記念日 コドス抵抗の日

*現地調査にもとづき筆者作成

教的背景がみられないレバノン国民の祝祭日として、3月9日の教師の日、5月1日のメーデー、5月6日の犠牲者追悼の日、5月25日の南部解放の日、11月22日の独立記念日が該当する。これらのうち、犠牲者追悼の日は、第一次大戦中の1915年5月6日、オスマン政府のジャマル・パシャによって処刑されたア

ラブ民族主義を標榜する政治家と宗教指導者を追悼する日である。ベイルートで14名、ダマスクスで7名の計21名のキリスト教徒とイスラーム教徒が絞首刑に処せられた。シリアでもレバノン同様5月6日が犠牲者追悼の日に指定されている。南部解放の日とは、2000年5月25日、1985年以来イスラエル軍によっ



11月22日の独立記念日に行進するキリスト教系学校の生徒

て占領状態に置かれていた南部レバノンからイスラエル軍が撤退した日を記念する祝日である⁴¹⁾。

一方、宗教的な意味をもつ祝祭日は、キリスト教系とイスラーム系に分類が可能である。キリスト教に関係する祝祭日として西方・東方教会を含め、2月9日の聖マロン祭、11月1日の全聖人祭、12月25日のクリスマス、イースター（西方および東方教会）が採用されている。イスラームに関係する祝日として、断食（ラマダン）明けの大祭であるアル・フィトル、犠牲祭のアル・アトハ、イスラームの新年を意味するヒジュラ、預言者ムハンマドの誕生日、アーシューラーが休日に指定されている。ヒジュラは「移住」を意味するアラビア語で、622年の預言者ムハンマド一行のメッカからメディナへの移住を指し、その後、ヒジュラのおこなわれた年を起源とするヒジュラ暦が採用された。アーシューラーはシーア派第3代イマームのフサインがカルバラー（現イラク）の地でウマイヤ朝軍に殺害されたことに思いをはせ、悲しみを共有する日である。シーア派にとってとくに重要な記念日と位置づけられている。

以上がレバノン政府によって指定された休日である。その他に、「イスラーア」、「アル・ガディールデー」、「コドス抵抗の日」が学校の休日として取り上げられている。イスラー

アは、預言者ムハンマドが、マディーナに遷都する一年ほど前に、神から授かった奇蹟「夜の旅（イスラーウ）と昇天（ミアラージュ）」のことを指す⁴²⁾。アル・ガディールデーはシーア派系の祝日として分類可能であり、コドス（Qodos）抵抗の日はイスラエル闘争の必要性を訴える日として位置づけられる。アル・ガディールデーは、預言者ムハンマドがメッカ巡礼後、アル・ガディールの地で自分の後継者としてアリーを指名した日とされ、初代イマームとしてのアリーの正統性を主張するシーア派にとって大変重要な記念日である。コドス抵抗の日は、ホメイニ師が全世界のムスリムに対しその団結を呼びかけたことにちなんで設定された。メッカに変更される前にキブラ（礼拝の方角）であった聖地コドスがイスラエルの支配下にあることに抗議する日としてラマダン月最後の金曜日をそのように名付けたものであり、政治的に強いメッセージをもつ記念日である。

1) シーア派系学校の休日

（ジャーファリーエ・スクール）

ジャーファリーエ・スクールでは、政府によって指定されたレバノン国民の祝日がすべて学校の休日として位置づけられている。宗教に関する休日としてキリスト教系のクリスマスとイースターが、イスラーム系ではアル・フィトル、アル・アトハ、ムハンマドの誕生日ならびにシーア派系のアーシューラーが取り入れられている。なかでもアーシューラーは、学校の所在地がスール（Sour）というシーア派信徒の主要な居住地域にあり、ジャーファリーエにとってとくに重視される。例えば、レバノン政府はヒジュラ暦1月1日から10日間のアーシューラーのうち最終日1日だけを休日にするが、住民がアーシューラー行事に関心が高く、ジャーファリーエは基本的

に第1日と9日、10日を休日としている。同校の講堂では同学校組織が主催するアーシューラーの儀礼が初日から10日間執りおこなわれる。また、スールは交易で栄えた港湾都市で、近くにキリスト教徒の居住地域もあることから、キリスト教系の祝日としてクリスマス、イースターなども取り入れている。イスラームの新年に相当するヒジュラはアーシューラーの第1日と重なるが、ジャーファリーエではイスラーム暦1月1日をヒジュラではなく、アーシューラーの第1日として取り扱っている。シーア派系学校としての特徴を示しながら、地域の宗派的特徴に配慮した休日が選択されている。

（アーミリーエ・スクール）

アーミリーエ・スクールもレバノン国民の祝日に分類されるものはすべて学校の休日に指定されている。聖マロン祭、全聖人祭、クリスマスのキリスト教系祝日も取り入れられ、イスラーム系では、アル・フィトル、アル・アトハ、ヒジュラ、ムハンマドの生誕日、アーシューラーといったムスリム共通の祝日を取り入れられている。また、どちらかといえばスンナ派系の祝祭日といえる「イスラア」をシーア派系学校が休日としている点は興味深い。一方、アリーの正統性を確認するアル・ガディールデーは以前は休日とされていたが、その後、休日から除外された。さまざまな宗派が混在するバイルートという地理的要因とともに、学校の休日などの共通化を目指す「私立学校連盟」の存在が同校のシーア派的イメージを弱めることに結びついている。

（マバラート系学校）

マバラート系学校でもレバノン国民の祝日がすべて学校の休日に取り入れられている。イスラーム系ではアル・フィトル、アル・ア

トハ、ヒジュラ、ムハンマドの生誕日といったムスリム共通の休日とアーシューラーをはじめアル・ガディールデーと第12代イマーム・マフディの生誕日といったシーア派系の休日が指定されている。一方、イランのホメイニ師が提唱したとされるコドス抵抗の日は学校の休日として採用されていない。マバラート系学校は、2月9日の聖マロン祭やイースターに相当する期間を学校の休日に取り入れている。しかし、2月9日を「2月9日の祝日」として、イースターを「春の祝日」という名称にし、キリスト教に関する祝祭日であることを明示していない。

（ヒズブッラー系とムスタッファ系学校）

ヒズブッラー系学校とムスタッファ系学校は、まったく同じ休日を取り入れている。両校の休日は、レバノン国民の祝日に分類される休日はすべて取り入れられている。一方、クリスマス、イースター、聖マロン祭などキリスト教系の祝祭日は1日も学校の休日に含まれていない。イスラームに関係する祝祭日では、アル・フィトル、アル・アトハ、ヒジュラ、ムハンマドの生誕日、アーシューラーをはじめアル・ガディールデーと第12代イマーム・マフディの生誕が祝日として取り入れられている。また、ホメイニ師が提唱したコドス抵抗の日が学校の休日として位置づけられ



ムスタッファ系学校の授業風景（バイルート）

る。このほか、学校の休日には指定されていないものの、6月4日のホメイニ師の命日、2月11日のイラン・イスラーム共和国の建国日、初代イマーム・アリーの誕生日（イスラーム暦第7月13日）などにはそれぞれの記念日にちなんだ学校行事が実施されている。

（アマール系学校）

アマール系学校はレバノン政府の教育政策を尊重し、それに従うことを基本方針にしている。アマール系学校の休日は、レバノン政府が決定したものと同じである。レバノン国民の祝日はすべて学校の休日に取り入れられ、クリスマス、聖マロン祭、イースター、全聖人祭といったキリスト教に関する祝祭日もアル・アトハ、アル・フィトル、ヒジュラ、ムハンマドの誕生日といったイスラーム系の休日も学校の休日に指定されている。一方、アーシューラーは休日になっているものの、アル・ガディールデーや第12代イマームであるマフディの誕生日は休日として取り入れられていない。しかし、例えば、アル・ガディールデーではホームルームや宗教の時間にガディール・ホムの伝承に係わる講話や歴史が教えられるなど、シーア派の重要な祝日の内容や意味が授業で取り入れられている。



アマール系学校の授業風景（ベイルート）

（まとめ）

レバノン国民の休日に相当する、独立記念

日、教師の日、メーデー、南部レバノン解放の日、犠牲者追悼の日はすべてのシーア派系学校で政府の決定どおり取り入れられていた。一方、信仰や歴史観に関わる祝日は学校間で大きな相違があった。例えば、アマール系学校は、キリスト教系の休日を含み、レバノン政府が指定するすべての休日を学校の休日としていた。ここにはイスラーム性を排しレバノン政府と協調して政治をおこなおうとする上部組織アマールの意向が投影されている。スールに拠点をもつジャーファリーエ・スクールは、アーシューラーを重視する一方、キリスト教系の休日であるクリスマスとイースターも取り入れている。スールはシーア派の主要な居住地域であるとともに、キリスト教徒が比較的多数居住している都市でもある。アーミリーエ・スクールは、クリスマス、聖マロン祭、全聖人祭といったキリスト教系休日を取り入れ、レバノン政府が休日に指定していないスンナ派系のイスラームを採用している。同校はベイルートを拠点にする伝統校で、教科書や休日の共通化を目指す「私立学校連盟」の加盟校であり、また、スンナ派系学校とも関係が良好なことが影響していると考えられる。ヒズブッラー系学校とムスタッファ系学校は同一の学校休日を設定している。両学校は、キリスト教に関する祝祭日を一切学校の休日に取り入れられない一方、レバノン政府が指定したすべてのイスラーム系の祝日に加え、アル・ガディールデーと第12代イマームの誕生日、ホメイニ師が提唱したコドス抵抗の日を取り入れている。ヒズブッラーは反米・反イスラエル政策など政治目標や運動でイランと共通の認識をもっており、また、多大な財政支援をイランから受けている⁴³⁾。ヒズブッラーとイランとの関係ならびにその歴史認識と価値観が両校の休日に投影されている。マバラート系学校は、2月9日の聖マロン祭や

イースターに相当する期間を学校の休日として取り入れているものの、2月9日を「2月9日の祝日」、イースターを「春の祝日」とし、キリスト教に関する祝祭日であることを明示していない。このように学校の休日には各学校の政治的志向や教育観、地域性が強く反映されている。

結語 シーア派系学校の文化的特質

ベール着用と学校の休日に関する考察で、これらを規定するものとしてイスラーム性と信仰、政治的志向、地域性の諸点が大きな役割を果たしていることが明らかになった。シーア派系学校の文化的特質をみる上でこれらをキーワードと呼んで良いだろう。これらのキーワードをもとにレバノン社会におけるシーア派系学校の文化的分類を試みたい。

ジャーファリーエ・スクールとアーミリーエ・スクールはともにベール着用を制服とせず、保護者と本人の意思に委ねていた。アーシューラーを重視する一方、キリスト教徒の割合が比較的高く、キリスト教系の祝祭日も学校の休日として採用している点が共通している。アーミリーエ・スクールでは、近年、シーア派信仰に結びつく祝日を学校の休日として控える傾向が顕著である。ジャーファリーエ・アーミリーエ両学校組織とも一定のイスラーム性を保持しながらスールならびにバイルトという地域に結びつき、地域の特殊性を考慮しながら学校運営をおこなっている。これらの点から両学校を「地域型」の学校と分類したい。ヒズブラー系とムスタッファ系学校はともにベールの着用を制服規定に盛り込み、学校の休日を共通化し、ヒズブラーとイランに近い歴史認識と政治的志向をもち、シーア派信仰に結びつく休日を重視していた。アル・ガディールデーやコドス抵抗の日などレバノン政府が採用していない祝日・記念日

も独自の判断で取り入れる一方、キリスト教系休日は一切採用されていない。レバノン政府が宗派間のバランスを尊重した学校の休日を採用するのと対照的である。シーア派としての信仰を重視し、イランの宗教指導者の影響が強いことから「イラン・シーア派型」と分類できる。マバラート系学校でもベールの着用が規定され、シーア派の信仰が学校教育に反映されていた。しかし、同校ではイランとの結びつきをイメージさせる休日は取り入れられていない。キリスト教系休日はそれらの名称を明示しないという前提で取り入れられている。このように信仰を重視した学校教育をおこなっているものの、レバノン社会の宗派的多様性にも一定の配慮がなされていることから、ヒズブラー系とムスタッファ系学校とは区別して、「レバノン・シーア派型」に該当する。アマル系学校はベールの着用を服装規定に盛り込まず、政府の決定どおりの休日を学校休日に採用している。また、アマルは特定の宗派の利害を原則として政策に取り入れれない世俗的政党を目標に掲げ、これらの方針はアマル系学校の休日にも反映されている。これらの背景からシーア派系学校のなかでは「世俗型」と位置づけられよう。しかし、同校の生徒はシーア派信徒で占められ、また、女子生徒にはベールの着用が認められイスラーム的配慮もなされていることから、「ライシテ」の教育方針が行き渡っているフランスの「世俗教育」とは本質的に異なる。

歴史的にシーア派コミュニティは長年にわたり政治・経済にとどまらず文化においてもシーア派としての信仰やアイデンティティを表明する機会に恵まれなかった。内戦終結後、一転して、政治や学校教育の分野でそれが可能になったのであり、抑圧されていた人々が信仰と価値観を自分たちの学校で主張したいと考えることに理解ができない訳ではない。

しかし、ヒズブッラー系とムスタッファ系学校のように学校教育として女子生徒にベールの着用を義務づけ、キリスト教系休日を学校の休日として一切認めない教育方針には一種の違和感をもつことも事実である。これらの学校組織では歴史教育や宗教教育といった教育内容面でも特定の政治的志向やシーア派信仰が反映されている⁴⁴⁾。

筆者はレバノンの公教育において重要な位置を占める私立学校、シーア派系学校が上記の文化的特質を維持したまま将来にわたり運営されるとは考えていない。それはシーア派系学校のなかにイスラーム性やシーア派信仰に関わる採択基準を見直す動きが存在するからである。例えば、「私立学校連盟」のメンバーであるアーミリーエ・スクールではシーア派の信仰が強調される祝日・記念日が学校の休日から削除される傾向にあり、今後一層の世俗的傾向が打ち出される可能性がある。また、マバラート系学校では2002年度まで男女ともズボンが制服とされていたが、女子生徒の希望を取り入れ、現在、初等課程1年から3年までではあるが女子生徒にスカートが制服として採用されている。このようにシーア派系学校ではイスラーム性や信仰が考慮されつつも、制服のデザイン・色彩や学校の休日などの制度ならびに教育内容が一層多様になり、あるいは世俗性が促進された学校に変容している可能性を指摘しておきたい。

(注)

- 1) 『朝日新聞』2005年4月29日付朝刊。移行内閣は、今後、新憲法の制定や国内の治安回復に取り組む。しかし、石油相や国防相などの主要ポストが決まらず、1月の国民議会選挙をボイコットしたスンナ派の主要な政党は入閣を拒否するなど課題は山積している。
- 2) レバノンにおける公認宗教宗派は、イスラーム(教)とキリスト教に大別できる。イスラーム

(教)として、スンナ派、シーア派、ドルーズ派のほか、少数派として、イスマイル派、アラウィ派があり、キリスト教系では、マロン派、ギリシャ正教、ギリシャ・カトリックおよび少数派として、アルメニア正教、アルメニア・カトリック、シリア正教、シリア・カトリック、カルディア教会、ラテン教会、各種プロテスタント、ユダヤ教、コプト教会の各派である。

- 3) 制度上の特徴はマロン派とスンナ派の二大宗派体制を前提にしながら、各宗派のバランスの上に運用されることである。具体的には、1) 大統領、首相、国会議長など主要なポストを、2) 国家議員定数を、3) 公務員の採用者数などを、各宗派に割り当てることである。
- 4) 宗派主義は、政治、行政の分野では固定化を意味する制度である一方、文化面で宗教法や指導者の権威など広範な権利を認めるという特徴をもつ。生活に直結する分野で広範な権利を認めたことで宗派が政治に抱く不満を解消してきたといえる。学校教育においても、本来、憲法(第9条ならびに第10条)や教育法規(法令第1436号など)により私立学校に対する教育上の権利は一定の制限を受けるはずである。しかし、憲法で認められた宗教教育のみならず、カリキュラム編成、教科書選択に関する決定権も実質的に各私立学校に与えられているに等しい(三尾真琴「宗派主義と教育の自由—国民教育化を図るレバノンのジレンマ」名古屋大学大学院教育学研究科『教育論叢』第43号、2-4頁、2000年)。
- 5) 中東アラブ諸国では、一般に、中央集権的な教育制度がとられ、その中核が公立学校である。例えば、隣国のシリアでは、公立学校が全体の80%以上を占め、教育省が作成したカリキュラムと教科書が就学前段階から後期中等段階までのすべての教育課程で使用される。アルメニア系やギリシャ正教系の私立学校では、シリア人の官吏が校長に任命され監督をおこなっている(三尾真琴「シリアとレバノンにおける学校教育制度の比較—国民教育としての位置付けを中心に」日本比較教育学会編『比較教育学研究第25号』180頁)。
- 6) 公教育の非宗教性を原則とするフランスで2004年9月から学校での宗教的帰属を示す標章や服装を禁じた「宗教スカーフ禁止法」が施行された。また、言語を基盤にした分権的教育制度がとられているベルギーでは、2001年9月の「同時多発

テロ」以降、一部の公立学校でムスリム女子生徒にベールの着用をやめるよう通達が出されるなど、ベール着用に対する規制が強まりつつある。他方、1923年の建国以来「世俗主義政策」がとられてきたトルコでは、2002年に発足したイスラーム的性格をもつ公正発展党（AKP）の政権下、公立学校の教師や女子生徒に対するベール着用を容認する議論が広がりを見せしている（『朝日新聞』2002年11月26日付朝刊）。

- 7) シーア派とは「シーア・アリー」の略称である。シーアは「派」を意味し、したがってシーア・アリーとは「アリー一派」の意となる。預言者ムハンマドの従兄弟であり、娘婿であったアリーを預言者亡き後の指導者（イマーム）と認めて、彼に忠誠を誓った人々をシーア派と呼ぶ。十二イマーム派は、アリーを初代イマーム、アリーの長子ハサンを第2代、ハサンの弟のフサインを第3代として、第12代のムハンマド・マフディまでをたどる。第12代イマームは「隠れ」（ガイバ）状態に入っており、世の終末に再臨し、正義を実現すると信じられている（日本イスラム協会他監修『新イスラム事典』平凡社、2002年、210-211頁を参考にした）。
- 8) レバノン内戦は、1975年7月に起きたパレスティナ・ゲリラとキリスト教右派の民兵組織ファランジスト党との衝突を契機とし、全土に広がったものである。内戦の背景には、PLO（パレスティナ解放機構）とパレスティナ難民に対し「故郷を追われたアラブの同胞」とみる勢力と「レバノン国家を破壊に導く集団」とみる勢力で国内が二分された。内戦は、当初、パレスティナ問題に対するキリスト教右派とイスラーム系左派の民兵による衝突の図式としてとらえることができたが、その後シリアの介入、イスラエルのレバノン侵攻、マロン派とドルーズ派の抗争、シーア派民兵組織によるパレスティナ難民キャンプの襲撃、マロン派内部での主導権争いなどがおき、内戦の構図を複雑にした（レバノン内戦の議論と分析については、小杉泰『イスラーム世界』筑摩書房、1998年、183-191頁ならびにWilliam Harris, *Faces of Lebanon Sects, Wars, and Global Extensions*, Markus Wiener Publishers, 1984, p.190.を参照）。レバノン内戦は、独立以降最悪のものになり、約15万人の死者と20万人近くの負傷者を出し、工場や住宅破損などの被害総額は200億ド

ルに上ると推定された。また、総人口の4分の1に相当する80万人が国外に退避を余儀なくされ、海外に流れた資金も約300億ドルに上った。経済状況も著しく落ち込み、GDPは内戦発生前の50億ドル台から90年には20億ドル台にまで減少した（在レバノン日本大使館『レバノン概況』1996年による）。

- 9) マロン派は、レバノンにおける最大のキリスト教宗派である。彼らはキリストの三位一体論ではなく、キリストが神性と人性の二つの性質と神としての一つの意志をもつという単意論を教義として受け入れたため、ビザンツ皇帝によって迫害され、レバノン山脈周辺に移住し、その地でコミュニティを形成した。十二世紀になると、十字軍をとおしてフランスおよびローマ・カトリックとの関係が築かれた。十八世紀にローマ法王の権威に服し、ローマ・カトリックの教義を受け入れ、中東地域で最初の東方帰一教会となった（武笠明子・三尾真琴「キリスト教マロン派」綾部恒雄監修『世界民俗学事典』弘文堂、2000年、208-209頁）。
- 10) スンナ派はイスラーム共同体内で90%以上の圧倒的多数を占める。正式な名称は「スンナと共同体の民」と呼ばれる。イスラーム共同体が全体として受け入れてきた預言者のスンナ（慣行、範例）にしたがう人々という意味をもつ（前掲書『新イスラム事典』234頁を参考にした）。
- 11) William Harris, *op. cit.*, pp.68-76.
- 12) 歴史学者のカマル・サリビ（Kamal S. Salibi）は、「シーア派は、人口の上では主要な宗派に位置していたものの、社会・経済・教育などの分野で、社会の底辺を構成し、スンナ派からは異端として無視され、蔑まれた宗派であった」と指摘し（Kamal S. Salibi, *The Modern History of Lebanon*, Caravan Books, 1977, p.140）。マイケル・ジョンソン（Michael Johnson）は、「シーア派の居住地はベイルートなどの都市と遮断され、教育の機会も政治への参加もほとんど与えられていなかった」と述べている（Michael Johnson, *Class & Client in Beirut - The Sunni Muslim Community and the Lebanese State 1840-1985*, Ithaca Press, 1986, p.170）。
- 13) 中村廣治郎『イスラーム—思想と歴史』東京大学出版会、1977年、105頁。
- 14) シーア派信徒はフサインの戦死を殉教とみなし、哀悼祭の期間中、彼らの殉教劇（タアズィー

- イェ)を上演したり、聖職者によるフサインの物語(ロウゼ)を聞いたり、街頭パレードをおこなったりする。服装は黒色が奨励され、婚礼などの「ハレ」の儀礼は慎まれる。アーシューラー期間中、シーア派の居住地では服喪一色になる。
- 15) 上岡弘二「イランの民衆のイスラムと社会意識」加納弘勝編『中東の民衆と社会意識』アジア経済研究所, 1991年, 79-80頁を参考にした。また、アーシューラーのもつ不義に対する抵抗・闘争は、しばしば民衆蜂起の形をとってあらわれた。例えば、1979年のイラン・イスラム革命にいたる1978年のアーシューラーは大規模な民衆蜂起となり、革命の流れを決定づけた(山岸智子「史書・教書・殉教語りーイラン人にとってのカルバラの悲劇」義江彰夫, 山内昌之ほか編『歴史の文法』東京大学出版会, 1997年, 132-133頁)。
- 16) 小杉は、レバノン・アミール山地, イラク・ナジャフ(およびカルバラ), イラン・コム(およびマシュハド)間で、ウラマーの人的ネットワークが機能していると論じる(小杉泰「アラブ・シーア派におけるイスラム革命の理念と運動ーヒズブッラー(レバノン)を中心として」『国際大学中東研究所紀要』第5号, 62頁)。
- 17) ドルーズ派は、十一世紀初頭、ファーティマ朝カリフであったハーキムを神格化することで成立した。レバノンのほか、シリア, ヨルダン, イスラエルなどに居住する。レバノンでの宗派分類上はシーア派の分派として位置づけられるが、ムハンマドを使徒と位置づけず、コーランとは異なる独自の教典「ヒクマ・シャリーファ」(al-Hikma al-Sharifa)をもち、メッカに向かって日々の礼拝も金曜日の集団礼拝もおこなわない(宇野昌樹「ドルーズ教徒の歴史と社会ーシリアのJabal ad-Druze」日本中東学会編『日本中東学会年報』第4号, 1989年, 107頁)など大きな相違がある。
- 18) William Harris, *op. cit.*, p.117.
- 19) Evelyn Aleene Early, *The Amiliyya Society of Beirut: A Case Study of an Emerging Urban Zaim*, Master thesis, American University of Beirut, 1971, p.25.
- 20) *The Daily Star*, Apr. 5, 2001.
- 21) Aman Atiyyah, *Development of Shi'ite Education in Lebanon*, Master thesis, American University of Beirut, 1972, p.145.
- 22) フランス委任統治からの独立後、シーア派はマロン派, スンナ派に次ぐ国会の議席を獲得したものの、閣僚, 判事, 行政職の部局長, 在外公館, 市長など行政の主要ポストの獲得数は、マロン派とスンナ派に比べ大きく下回った(Michel Hudson, *The Precarious Republic: Political Modernization in Lebanon*, Random House, 1968, p.320)。
- 23) アマルとヒズブッラーは、1992年の国政選挙より代議員を国会に送り込んでいる。1992年にはアマルに所属する7名, ヒズブッラー系8名, 1996年には、アマル系8名, ヒズブッラー系7名, 2000年の選挙では、アマル系9名, ヒズブッラー系8名の公認候補が当選した。シーア派に割り当てられた議席は、1991年の法律改正により128議席中、27議席になった。内戦後実施された3度の総選挙のすべてで両政党がシーア派議席の過半数を占めている事実は、両組織への安定したシーア派住民の支持を裏付けるものになる(三尾真琴「ヒズブッラーの二つの顔ーレバノン社会と中東域内政治をめぐって」日本国際政治学会編『国際政治』第121号, 1999年, 145-147頁)。
- 24) 小杉泰, 前掲書「アラブ・シーア派におけるイスラム革命の理念と運動ーヒズブッラー(レバノン)を中心として」62頁。
- 25) Aman Atiyyah, *op. cit.*, pp.196-197.
- 26) Annette Renee Chapman-Adisho, *Mission Civilisatrice to Mandate: the French and Education in Syria and Lebanon*, Master thesis of the University of Louusville, 1998, pp.8-9.
- 27) 小杉泰, 前掲書「アラブ・シーア派におけるイスラム革命の理念と運動ーヒズブッラー(レバノン)を中心として」62頁を参考にした。
- 28) Michael Johnson, *op. cit.*, p.14.
- 29) Evelyn Aleene Early, *op. cit.*, p.103.
- 30) *Ibid.*, pp.105-107.
- 31) マッカーシード・ナバティーエ・スクールは、1910年に男子学校としてナバティーエで設立された。数学・歴史・外国語などの教科を取り入れ、男女同権の教育論を重視した。1920年には女子初等学校が、1964年には女子中等学校が、1966年には女子職業学校が設立され、現在に至っている。
- 32) シャラファッディーンは著名な法学者で、ス

- ンナ派にシーア派の教義を認めさせ、スンナ派とシーア派の架け橋になったとして後に高く評価されている。
- 33) Evelyn Aleene Early, *op. cit.*, p.42.
- 34) *Ibid.*, pp.46-47.
- 35) *Ibid.*, p.60.
- 36) 十二イマーム派の宗教学者のうち、優れた上級宗教指導者の称号である。2004年7月現在、レバノンのアヤトラーはファドララー師のみである。
- 37) アマルはシーア派の民兵組織としてレバノン内戦が勃発した1975年に設立された。1980年代にはシーア派の民兵組織として最大のものになった。そのアマルの指導者になったナビーフ・ベリのもと、レバノン政府との協調関係を重視する現実主義的な路線を採用し現在にいたっている。
- 38) ヒズブラー（「神の党」）は、イスラエル軍がベイルートに侵攻した1982年に民兵組織として創設された。1）ホメイニ師によるイラン革命をモデルとしたイスラーム国家の樹立、2）反イスラエル闘争ならびにパレスティナ国家の樹立、3）「宗派主義」の廃止、4）シーア派住民の生活向上に向けた支援、などを主な目標に掲げた（A. Nizar Hamzeh, "Lebanon's Hizbullah: from Islamic revolution to parliamentary accommodation" *Third World Quarterly*, Vol 14, No 2, 1993, p.322.）。
- 39) 湯川武, 佐藤次高「儀礼と社会の慣行」佐藤次高編『イスラム・社会のシステム』筑摩書房, 1986年, 195頁。
- 40) 『コーラン』の日本語訳については、五百旗頭洋二郎他編『聖クルアーン』日本ムスリム協会, 1992年によった。
- 41) 2000年5月25日以前、南部レバノンを占領するイスラエルに対する抗議運動は、3月14日におこなわれていた。3月14日は、1978年の同日にイスラエル軍がパレスティナ・ゲリラの掃討をねらいレバノンに侵攻した日である。その後1982年に再侵攻があり、1985年以降、南部レバノンはイスラエルに占領された状態にあった。この占領状態への抗議およびイスラエル軍撤退の意思表示として、レバノン全土で黄色いリボンや洋服や車のラジオアンテナなどにつけてレバノン人の連帯を表明したのが3月14日のゼネストの日である。この抗議行動がレバノン全土で展開されるようになったのは内戦終結後の90年代のなかばである。これまで南部レバノンに拠点をもつシーア派組織の抗議行動の一つであったのが、レバノン全土で展開される運動にまで発展していった。この抗議行動は、レバノン国民が共有する「反イスラエル」意識であり、またもっともコストのかからない運動であるため、宗派の違いや歴史観の異なった人々も連動しやすかったといえる。宗派を超えたレバノン国家、レバノン人としての連帯を示す運動として国民の間に定着した運動であった。
- 42) 黒田壽郎編『イスラーム辞典』東京堂出版, 1983年, 133頁。
- 43) ハムゼによれば、1982年86年の4年間に18,000万ドルもの資金がイランから支給されたという（A. Nizar Hamzeh, *op. cit.*, p.325）。
- 44) 三尾真琴, 前掲書「宗派主義と教育の自由」4-8頁。